

KKKK 学術・芸術アカデミー図書室

対応者：LLLL 大学日本資料担当者、同大学中国資料担当者、KKKK 学術・芸術アカデミー図書室職員

訪問・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

□訪問調査の結果

1 コレクションについて

KKKK 学術・芸術アカデミーは、数量的には比較的少数だが、江戸時代和古書等を所蔵している。それらは 1960 年代に大学に寄贈された。

今回の訪問調査は上記和古書等を主たる対象とし、それらの資料の状態、劣化損傷、保管環境、取り扱い、デジタル化等について、視察し説明を受けるとともに担当者と意見交換した。

所蔵各資料の価値について質問された。資料（群）の評価、価値判断は訪問者の専門ではないが、一般的には、学術的価値、資料の希少性、金銭的価値及等で判断されるべきものと思料する。また該当国内における歴史的・文化的価値の観点も重要である。

まずは『国書総目録』『コーニッキ目録』等で検索・調査する、機会を得て古典籍専門家の判断を仰ぐ、が考えられる今後の方策である。

2 資料の状態

今回訪問で見たものの中で、和本で綴じの外れたもの、表紙のとれたもの、虫食い跡、かび被害痕跡の見られるものが散見された。しかし図書の製本、紙質ともに全般的には良好で、閲覧不能のものはない。

虫・かびは過去の痕跡のみで、現在はまったく問題がない。

3 資料の保管とその環境

資料群は貴重書室のキャビネットにすべて平置きで収納され、大変、丁寧に保管されている。セキュリティ上の管理も万全と理解した。

貴重書室及びキャビネット内の温度・湿度は大変、良好と理解した。しかし、保管環境の実状、季節変動を知るために、貴重書（和書だけでなく）保存のため、自記温湿度計、データロガー等による継続的な温度・湿度測定を勧めたい。

4 資料保存上のコメント

傷んだ4つ目綴じ冊子の中性紙で包装して保管しているのは大変、良い保管方法、取り扱いである。

一方、資料が帙、保存箱等に収納されず裸のままキャビネットに保管されている図書がある。キャビネット保管により資料保護はされているが、さらに保存箱に収納（1冊ずつでなくても良い）するか、あるいは中性紙で包装（ラッピング）を検討するのが良いのではないか。

4つ目綴じの綴じ糸が切れた本は、誰でも綴じ直しすることが可能である。しかしその必要は通常はない。これは、「修復（restoration）はできるだけ避ける」と言う世界共通の資料保存の原則に基づく考えである。（参考：木部徹「表紙は外れたままでよい」）

もし綴じ直すケースが生じた場合は、綴じ糸が歴史の証拠となることがあるので、外した糸を封筒などに収納して保管すること。

和本のなかに頁の順序が違っている書がある。これは以前の製本・補修などの際の不注意によるものと推察する。それを元の正当な順序に戻すことは可能だが、そうはせずに頁不順の旨のコメントを付した紙片を作成し、図書に添えるのが良いと考える。

図書中にマーク付けの紙片が入っている図書が散見された。これらの紙片は酸性紙の可能性大でリグニン含有の懸念もある。図書中から外すべきである。但し、紙片は旧蔵者メモなど、内容的に重要な場合がある。これらは当該図書名、挿入頁（帖）、挿入箇所を示すもの（写真でも可）を付して、中性紙封筒に入れて別途、保管する。

資料取扱いのために白手袋が用意されていた。貴重書取扱いにおける白手袋使用は、以前に世界的に議論があった点だが、「使用しない方が良い」と考える。手袋着用では頁めくりが難しく、そのために返って資料を損なうことがある。貴重書閲覧などの際には、原始的な「利用前に手洗い励行」がベストである。但し、写真の取扱いは特別で、この場合は白手袋着用が必要である。

5 資料デジタル化計画

LLLL 大学は東アジア関係資料を対象に資料デジタル化を計画している。KKKK 学術・芸術アカデミー図書室所蔵和古書もそれに含まれる。デジタル化は、展示とともに古典籍等の利用価値を高める重要な方策であり、高く評価される。

関連して、デジタル化の場合に綴じを外して撮影することの可否について質問があった。これはデジタル化の目的、目標等にも依るが、以下が訪問者のコメントである。

一般的には、洋古書と異なり和本はしなやかで、資料内容は綴じを外さずにデジタル撮影が可能である。片面（1頁）ずつ撮影する方法もある。基本は「綴じを外さないで撮影」が良い方法である。

6 防災計画

現状では図書館として蔵書の防災計画はないと聞いた。蔵書防災計画は重要であり、大学図書館全体の課題として取り組まれることを期待したい。その点、大学図書館本部など、関係部署に働きかける必要があるだろう。

関連して言うと、デジタル化の際にはバックアップをとり、1セットを別所に保管することを勧めたい。万が一の災害に備えるためである。

7 国内文化財調査など

LLLL大学では、国内各機関に散在している東アジアの古書、美術品の所在調査等を実施中である。その目録（インベントリー）作成、デジタル化も考慮している。対象には、日本の古書、美術品等も含まれる。

そのなかで、国立博物館は日本の写真絵葉書を所蔵と聞いた。その希少性、歴史的貴重性の評価が必要なら、同種の写真（横浜写真と呼称される）に関心をもつ横浜開港資料館にコンタクトするのが良いと思われる。

実施中のプロジェクトは、文化的、学術的、歴史的に、大変、重要な計画である。今後、いずれかの時点で、EAJRS年次大会に発表されることを期待したい。他国、他地域の場合も含め、EAJRSが関心を持つべきプロジェクトと考える。日本の関係機関の支援・協力も追求されるべきであろう。

MMMM 大学 NNNN 図書館

対応者：NNNN 図書館司書 2 名

訪問・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

訪問調査結果

1 コレクションについて

MMMM 大学 NNNN 図書館は日本語蔵書約 3.5 万冊（ほかに大学図書館として欧文日本関係図書 1.5 万冊）を所蔵している。そのほかに和古書等を数十点所蔵しており、それが今回の訪問調査の対象である。

2 資料の保管とその環境

和古書等は大部分、書庫内の頑丈な貴重書キャビネットに収納されている。

キャビネット内の温度・湿度は良好に保たれていると理解した。しかし、保管環境の実状を知るために、書庫管理部門と連携して、書庫内の自記温湿度計、データロガー等による継続的な温度・湿度測定を勧めたい。既に書庫内温度・湿度測定がされているのであれば、測定結果を資料担当サイドで把握しておく必要がある。

キャビネットの真上に水道管が通っている。水道管漏水の危険性があるので、キャビネットの位置を少しずらすことを検討していただきたい。

3 資料の状態

全体的に見て、資料の状態は良い。和古書がすべて平置きされているのも良い。虫食い痕の見られる和書があるがこれは過去の痕跡で、現在は虫害はない。4つ目綴じで糸切れのものがあ

4 資料保存上のコメント

保管上は、中型の3個の保存箱に収納されているもの、やや丈夫な紙に包んで保管されているもの、封筒に収納のもの、裸のまま保管されているもの、の4種類が見られる。中型の箱は資料本体より大きく、そのため、すき間にクッションを詰めて安定させている。これは良い工夫である。

紙に包んで保管するのは良い方法だが、この場合、その紙質（酸性紙でないこと、リグニ

ンを含んでいないこと) 検査が不可欠である。また裸のまま保管されている和書にも何らかの保管上の手当てが望ましい。

封筒(中性紙)に収納は、保護上は良い方法だが、資料出し入れの際に、図書が擦れたり、端が折れたりする恐れがある。その点から、別の保護方法を採用するのがベターと考える。

アーカイバル・ボード使用の保存箱の調達値段は邦貨で1000円～1300円程度と聞いた。であれば、紙で包んだ和本、裸のまま保管の和本は、順次、保存箱購入措置をとり、それに収納するのが適切ではないか。この場合、数冊を一緒に一個の保存箱に収納して良い。

虫食い、4つ目綴じ糸切れの和本については、閲覧利用が少ないことも鑑み、「何もしない」で保管するのが良いと思料する。つまり「治す」必要はない。

4つ目綴じの糸切れ本は、誰でも綴じ直し可能であるが、その必要は、通常はない。これは「修復(restoration)」はできるだけ避ける」と言う、近年、世界的に共通されるに至っている資料保存原則に基づく考えである。(参考:木部徹「表紙は外れたままでよい」)

和本表紙に接着テープでラベルを貼付したものが1冊あったが、その接着テープが変色している。これは不適切な材料を使用した扱い事例の1つである。この接着テープはできれば除去したいが、それには専門家に処置を委ねる必要がある。当面、課題を認識しつつ、そのまま「放置」で良いと考える。

5 特別資料

5.1 作家等関係資料

内容は書簡、色紙複製物など。価値評価は難しいが、必要なら日本近代文学館、専門の研究者等に尋ねるのも一法である。

オリジナルの書簡はそのまま重ねて保管されているが、1点ごとに中性紙折紙に挟んで保管するのが良い。

5.2 研究者の遺稿等

「平家物語」独訳を進めていた研究者の草稿及び訳業のために収集・使用した図書、雑誌等がみかん箱一箱、未整理のまま、別置されている。

上記については、受入れの経緯を調査すること、かつ資料(草稿等)が公開可能かを調べるのが肝要である。資料(特に原稿)が公開可能であれば、アーカイブズ資料として簡単に整理し、全部を一括して1点として目録を作成すること。そうすれば閲覧に供することができ、資料展示等にも活用できる。

6 防災計画

NNNN 図書館では IFLA、国立国会図書館、他の大学図書館のガイダンスと事例を参考に、「資料防災計画の立案」に熱心に取り組んでいる。この努力は高く評価される。

立案中の防災計画案について、次の2点を指摘しておきたい。

1) 計画案は主として施設の防災計画として立案されている。それは重要だが、蔵書の防災計画としては、それだけでは十分でない。資料防災キットの用意、火災が起きた場合の資料救助の優先順位付け、救済方法の想定、等が必要である。（参考：安江明夫「蔵書の防災計画：図書館の“must”」）

この点においては大学（総合）図書館との連携が重要であり、大学図書館関係部署と意思疎通を図って、効果的な資料防災計画を立案されるよう期待したい。

2) 施設の防災計画としては、「NNNN 図書館」としてではなく、1つの建物に配置された研究所としての防災計画とする必要があるのではないか。例えば火災が生じた場合、NNNN 図書館だけ対応することはできない。同じ建物にある別の図書館等と一緒に行動、対応しなくてはならない。この点、大学や研究所全体の管理部門と意思疎通をはかることを勧めたい。

7 大学図書館との連携

資料防災計画、アーカイバル・ボード使用の保存容器作製、資料保存場所の温度・湿度測定等において、大学（総合）図書館と連携協力することが必要ではないか。少なくともその方が効果的、省力的ではないか。この点を検討していただきたい。課題は「日本図書館」独自のものではないので、大学図書館を「巻き込む」のが良いのではないか。

0000 図書館日本課

訪問対応者：0000 図書館日本課職員

訪問・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

□訪問調査結果

1 コレクションについて

0000 図書館は約 25 万冊の日本語資料を所蔵し、うち約 21 万冊は OPAC 搭載済み。和古書は約 1000 点で、うち 670 点は OPAC 搭載済みである。今回訪問の対象は同和古書資料群である。同図書館は第二次世界大戦で和古書約半分と消失したので、その残り約半分である。書簡、原稿等のアーカイブズ的資料は所蔵していない。

2 資料の保管とその環境

和古書は書庫内の書架に平置きを基本として、配架されている。但し、一部に以前に洋装（または擬似的洋装）製本されたものがあり、それらは縦置きされている。帙、保存箱に収納されている書も多い。

現在、裸の状態配架されている和古書があるが、それらに対して、毎年、約 40 点、計画的に順次、保存箱を作成している。

保存箱作製については日本課で対象資料を選んで寸法どり（和本の測定）し、それを同館保存部署経由で外注により調達している。保存箱の値段は 1 箱当たり、10~11 ユーロと言う。手頃な値段でアーカイバル・ボード使用の良い品質の保存箱が作製されている。

書庫、書簡、和古書資料群ともに、とてもクリーンな状態に維持されている。これは一面では、後述の資料デジタル化の際のクリーニングによるものと推察したが、良い対処、対応がなされている。

書庫内温度・湿度は良好と見受けたが、季節変動などを知るために、和古書収納書架の温度・湿度測定（データロガー、自記温湿度計などによる）が必要と考える。

日本語資料部門で虫トラップにより虫害検査を実施中である。これは、同図書館が所属する

文化財団全体として実施している IPM (Integrated Pest Management) の一環である

3 資料の状態

利用が少ないためもあってか、全体的に見て、資料の状態は良い。

過去に製本された和古書の形態に問題あるものがあるが、それにより、保存上、問題が生ずることはない。そのため、これらについて以前の状態に戻す処置を講ぜず、「現状のまま」とするのが良いと思料する。4つ目綴じで糸切れのものがあるが、これも基本は「そのままが良い」と考える。(参考：木部徹「表紙は外れたままで良い」)

4 デジタル化

和古書約 600 点を既にデジタル化し、HP で公開しているのも優れた活動である。

5 防災計画

図書館として防災計画を有するが、これ施設と人を主たる対象としたもので、蔵書をターゲットとした防災計画は明文化されていないようだ。ただ、水濡れ資料の即時の冷凍処置対応などは館内で周知され、職員間で共有されていると言う。

実際的には一定程度、蔵書の防災計画があると言えるが、災害時の非常時連絡網の整備、外部コンサベーション機関との連携等を含めた資料防災計画の明文化が期待される。但し、この点は同図書館あるいは所属する文化財団全体に関わることである。

6 他部門との連携

館内のコンサベーション部門、デジタル化部門等との連携が円滑に進捗していると理解した。この点も評価される。

7 今後に向けて

既に記したように OPAC 未搭載の和古書、また保存箱未収納のものがある。しかし、それらは順次、整備される計画である。

所蔵和古書について、全体として優れた保存の取組みがされている。その取組みを整理、集成して EAJRS 年次大会などで発表されると、他の在欧諸機関の良い参考となるのではないか。特に和古書デジタル化及びそれに伴う諸活動は大変、優れ実践事例である。

PPPP 大学 QQQQ 図書館

対応者：QQQQ 図書館司書 2 名

訪問・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

□訪問調査結果

1 コレクションについて

PPPP 大学 QQQQ 図書館は約 70 点、400 冊程度の和古書を所蔵している。それらはアジア資料の特別室（以下、特別資料室）及び貴重書室で保管されている。これらが今回の訪問調査の主対象である。

所蔵和古書資料群については、その由来（同大学図書館が受け入れた経緯、時期など）を記した論稿がある。これは蔵書内容の理解、資料評価等において大変、有用である。またこれらについて、同大学図書館の依頼により日本人専門研究者が資料調査を行っている実績がある。この点も高く評価される。

PPPP 大学図書館のほかに PPPP 大学博物館所蔵の江戸期日本紙資料（主として浮世絵の絵画資料）があり、同資料群についても視察した。ただ、これは所管が異なるので本報告では、項目 7 で別記する。

2 資料の保管とその環境

和古書は、木製主体の特別資料室のキャビネット（ガラス窓付き戸棚）に、大変、良い状態で保管されている。但し、恒常的な温度・湿度測定がされていない。また、人工照明における紫外線防止タイプ使用が不明である。後者については、施設管理部門等に問い合わせる必要がある。

QQQQ 図書館は比較的寒冷地に立地しており、また和古書は特別資料室キャビネット内に保管されているので、温度・湿度環境に問題はないと考える。しかし、室内の温度・湿度をデータロガー／自記温湿度計により把握しておくべきであろう。

この点、貴重室の保管条件は万全で、同室では貴重書類が温度 15 度、湿度 45% の恒温・恒湿環境に保たれている。自記温湿度計も室内随所に設置されている。

3 資料の状態

全体的に見て、資料の状態は良い。和古書はすべて平置きで保管されている。虫・カビ害の懸念も見られない。

和古書の保護状態について言うと、保存箱に収納されているもの、丈夫な油紙のような紙で包装されているもの、裸の状態でも保管されているもの、に類別される。油紙状の紙は保存上の観点での品質が不明である。酸・リグニンを含有している懸念がある。また裸状態の和書はキャビネット内収納とは言え、課題が残る。

過去に水濡れした和書、4つ目綴じ糸切れの和書が散見される。

和古書に種々の紙片が挟み込まれているケースが散見される。

4 資料保存上のコメント

油紙状の紙に包装した和書及び裸状態の和書は順次、保存箱収納に移すのが妥当と思料する。保存箱は塵・埃、照明を遮断し、取り扱いの際にも保護の役目を果たす。また、アーカイバル・ボード使用により弱アルカリ性の雰囲気（紙の長命に益）を用意することができる。万が一の火災、水害の場合には良い保護を提供する。

但し、1点毎に保存箱に収納する必要は必ずしもない。複数点を1つの箱に収納するので良い。

水濡れした和書、4つ目綴じ糸切れの和書については、それらは利用に支障が生じていないようなので、「そのままにしておく」が適切、賢明な方策と考える。（参考：木部論文）

和古書に種々の紙片が挟み込まれているケースについては、挿入された紙片は酸性の可能性が高い（あるいは可能性がある）。またリグニン含有の懸念もある。それらは原資料に害（酸及びリグニンのマイグレーション）を及ぼすので、資料本体から外すべきである。但し、紙片は旧蔵者メモなど、内容的に重要な場合があり、これらは当該資料名、挿入頁（帖）、挿入箇所を示す図（写真でも可）を付して、中性紙封筒に入れて別途、保管する。不必要な紙片は廃棄が妥当と考える。

5 防災計画

同図書館は資料（蔵書）の防災計画を装備していない。これは和古書保存／アジア資料部門の範囲を超えるが、機会を得て、大学図書館当局に検討依頼するのが良いと考える。（参考：安江論文）

6 点検

資料保存において点検は重要な方策である。これには資料の現存確認、資料の状態、虫・カビ

害の有無、保管環境等が含まれる。

資料の現存確認等には和古書資料群の所蔵場所毎のインベントリー（所蔵リスト）が必要となる。それに基づいて、定期的に資料の現存確認、状態等を点検することが勧められる。

上記に関連して、次の2点を提案したい。

1) 現在、和古書の保存に関連して実施している（実施済み含め）事柄を列挙し、文書化（メモ書き程度でも良い）すること。これには、安全な施設での保管、保管環境整備（温度・湿度・照明など）、セキュリティ、保存容器収納、資料本体からの酸性紙片の除去（移動）、IPM（総合的虫害防止計画）、資料取り扱い、デジタル化、資料防災計画、目録整備（OPAC 搭載）、利用促進（展示含め）、中国資料担当との連携等の項目が含まれ得る。

そうすることで、和古書保存の取組みを総体的に見ることができるようになる。また、できていること、できていないことが見えやすくなる。

2) 同図書館で日本関係資料を担当するスタッフは一人で、すべてに任務に対応しなくてはならない。利用の少ない（ない）和古書等は、日常の多忙のなかで置き去りにされがちである。それは自然の成り行きである。しかし、であれば、1年に一日（あるいは半日で）、「和古書（保存）の日」とでも称して、定期的に、上記1)を基盤に和古書点検に務めるのはどうだろうか。そこから、点検作業とともに、和古書デジタル化、貴重書展示、他機関との連携などの構想も生まれてこよう。

7 博物館所管日本資料

同大学博物館は、日本関係の文物を相当、有する。そのなかの紙資料（浮世絵、古地図、絵入り本など）を視察した。収蔵場所は博物館倉庫であり、一般的保管環境、セキュリティ管理は良好である。

しかし、浮世絵が展示の際に額入りされ、それが上向きに（つまり、絵に照明が当たる状態）に保管されている。浮世絵などの彩色資料は光によるダメージを受けやすい。それゆえ、これらは、急ぎ、中性紙、白布などで額装を包むなどして、照明による変色、退色の被害を防がねばならない。この点は博物館の管理者に伝達済みであるが、実施確認を擁する。

博物館所蔵日本資料には大学図書館の学術資源としようものがある。これらはデジタル化済みでもあるので、何らかの形で、大学図書館の OPAC 等の DB とリンク付けすることが考えられないだろうか。